

淨仏国土と淨土教

——特に善導教を中心として——

千 賀 眞 順

淨仏国土の思想は大乗仏教の特色で、般若經等の諸大乘經典に等しく論明されている。多くの著論に歴史論思想的に系統付られてゐる如く、最も基本的な説と伝へられる道

行般若經に身命を賭して六波羅蜜の法を以て衆生を利し、菩薩の利他大悲の行願によつて淨仏国土教化衆生するといふ。故に淨仏国土説は菩薩の独自の自覚に立つ行願であることが注意される。この身命を捨てて利他の爲めに犠牲を払うというの^③はもと本生經に説いてゐる出家學道の自利門であつたが、大乘菩薩の自覚より般若經に於ては淨土を實現せんとする熾烈なる行願となり、更に菩薩の願思想の展

開となり、淨仏国土は仏道修行の必須条件となつた。即ち^④放光般若經の淨仏国土の本願、阿闍仏國經、大阿彌陀經の如き他方淨土の本願も展開しやがて純正なる淨土思想を發達せしめる地盤となつたのである。

^⑤この淨仏国土の理想は菩薩の行願として將來この地上に必ず實現すべきものであるところに特色を持つてゐる。即ち現實世界が余りに缺陷に充ち不完全極まるから、この地上的缺陷を列ねて之を除去し、以て先づ地上の客觀的欲求が理想化されてゐる。般若經の夢中行品、淨仏国土品の如きはまさにこの意味の理想国土成就を示したものと云うべきであらう。即ち理想の淨土の特色として夢中品には^⑥国土

の平坦なること、金沙地を布くこと、歲月あることなく而も広大なることが願はれている。又淨仏国土品には人間の五欲が適度に満足されるべく天の樂を聞き、天の香を香き百味の食を得、天香細滑にして意に隨つて五欲を充たすと説き、更に健康に相応しい生活として、夢中行品には衣服飲食・資生の具調うて短寿多病醜陋のないこと、法喜を食うて便利の患なきこと、冷熱風雜の四種の病氣のないことなどが願われている。これ等の例示で知れる如くこれが地上の淨土として成就することを詳述している。菩薩はかくの如き淨土を理想として自己の行願に不退転の努力精進を注ぎこの理想目的を成就せんとするのである。これ菩薩の菩薩たる所由で注意されるのは機の菩薩の自覚である。この自覚より菩薩の願を成就するものは行であるから、菩薩の行として六波羅蜜が極力強調されている。即ち菩薩が自己の身口意の行業を以て自己を淨め他人を淨めることが仏国土の成就となる、淨めるものは菩薩の般若波羅蜜である。故に智度論第二十七卷には「仏世界を淨めて衆生を成就するとは菩薩は空想応の中に住するも、復た礙あることなく、

衆生を教化して十善道及び諸の善法を行ぜしむ。衆生善法を行ずる因縁を以て仏土清淨なり」とあるが、これによつて個人の自己清淨はやがて他人を淨めるべきであるから菩薩の淨仏国土は衆生の共業の所感による。この自他の因縁によつて菩薩の行願がやがて淨土を成就するという菩薩の機の自覚、全能の聖道仏教の特色を持つ、維摩經仏国品には「仏宝積に言なく、衆生の類はこれ菩薩の仏土なり、菩薩は所在の衆生に隨つて仏土を取る。直心はこれ菩薩の淨土なり、菩薩成仏の時、不詔の衆生来て其国に生る。深心はこれ菩薩の淨土なり、菩薩成仏の時功德を成就する衆生其国に來生する、菩提はこれ菩薩の淨土なり、菩薩成仏の時、大乘の衆生その国に來生する。十善はこれ菩薩の淨土なり、若し菩薩淨土を得んと欲せば當に其心を淨むべし。其心淨なるに隨つて則ち仏土淨し。」とあり、ここに至つて菩薩の行願は極めて具体的唯心的な意味を有つやうになつたが終始一貫して特色と注意されることは菩薩の聖道的自利々他の自覚に於ては不変である。實に大乘仏教の行願の究極を明示したものと言い得られる。

斯く菩薩の理想の仏国は必ずこの地上に打ち建てられんとする所に特色がある。地上に打ち建てられてこそ初めて菩薩の行願の意味がある。利他大悲に燃える菩薩の高い理想に生きる菩薩の道である、向上の一路が期待される。ところが仏教は人を教えるもの、論理思弁の対象でなく、人間の修行得脱が目的であるから、先づ修行得脱する為めの能力素質即ち機を反省内観することが根本要件なりとして自力向上して証悟を得る菩薩の淨仏国土思想を追求しこの往生淨土の道が展開して来た。この場合は人間自己の機を見究める点に集注するがその契機となるものは五種の惡縁である。この所謂五種を契機として、ここに大乘菩薩道は一転して主觀に即して機を見る思想へ展開し、淨土經典に説かれ淨土教史に見らるる如く、自己の住む世界と時代について深い反省觀をなし、修行得脱に関する機の凡夫的考察より淨土へ願生する信行へと展開するに至つた。即ち二、三世紀の龍樹が空觀の実相を証悟して寧弱怯劣の機の宗教的自覺より称名不退の道を説き、四世紀の天親が唯識縁起を説いて我一心歸命の五念生因を説き、五、六世紀曇鸞が四

論の講説を捨てて五種の世無仏の時と説いて本願を發見し、之を伝承して六世紀道綽は涅槃弘性常住を説きつつ末法に念仏を説き、七世紀善導が人間性を深刻に洞察して本願念仏を体系され、法然上人亦還愚の自覺より選択本願を専修されし如くである。これら淨土教祖の往生淨土の熾烈なる展開となつた機縁は現実世界の矛盾、不如意が事由となつている。しかも自己に即しての業障の客觀的反映なりとし、淨仏国土は所謂實在の淨土に願生するところのみ可能であると言う淨土信行の道が説かれるやうになつた。しかもこの信仰の淨土は現実世界の高次に立つ彼岸の世界であり超過三界の所であるとされたのは極めて當然の理である。故に無量壽經には「無為泥洹の道に次し」と説き天親は往生論に「第一義諦妙境界の相なり」となし、善導は法事讃下卷に「極樂は無為にして實に是れ精なり、阿鞞跋致は即ち是れ無生なり」など言はれているが、ここに至つて信仰の淨土は觀念界と簡ぶところがない實在界と説かれてゐる。この会通は古今より論及されているが、普通淨土の課題は實現か願生かと宛も対立するかの如き傾向が仏教々

理の展開に見られる。この両面は等しく大乘仏教思想の特質で対立する二つの道ではない。要は機の二様性で大乘の真義に徹する点に於て同一延長線上の二点でなくてはならぬ。内面的に省察して相成相関することが首肯される。唯だ宗教的自覚を基調とする浄土教は機に即する仏教を相応せしめる結果、宛も浄仏国土を顧みないが如き口吻で往生浄土を勸化する。即ち機は教を發す根源である。機を中核として仏教を批判選択するところに浄土の教説が開顯され、これを体系された祖師こそ善導大師の教学である。

① 望月信亨著「浄土教概論」「浄土教の起源及び發達」木村泰賢著「仏教概論」

② 大正藏經第八卷四五七頁

③ 干瀉竜祥著「本生經の研究」

④ 大正藏經第八卷二〇頁、放光般若經第三問僧那品に「菩薩は人に於て齊限六度を願行し、普く衆生のために謙苦の行をなすべし。即ち摩訶僧那僧涅（著大鎧）を成じて衆生の為めに大誓願を起して自ら六波羅蜜を具足し他人を教へて六波羅蜜を具足せしむべし」とある如く、菩薩の浄仏国土の願行の基調をなすものである。

⑤ 望月信亨著「浄土教の起源及び發達」金子大栄著「彼岸の世

界」

⑥ 大正藏經第八卷、三四八頁

⑦ 同 右 四〇八頁

⑧ 同 右 三四七頁

⑨ 同 第二十五卷三三五頁

⑩ 同 第十四卷 五三八頁

⑪ 浄全第一卷一七頁

⑫ 同右 一九五頁

⑬ 同第四卷一八頁

⑭ 論註上卷（浄全一卷二二一）往生礼讚（浄全四卷三六〇）釈浄土二藏頌禪卷十一（浄全十二卷一二七）金子大栄氏「彼岸の世界」鈴木拙氏「禪と念仏の心理的基礎」等

二

① 導師の浄土教を明にするには導師以前を知る必要がある。シナに浄土經典が伝訳されたのが大體仏教傳來後約二百年、後漢靈帝の光和二年支婁迦讖により般舟三昧經が訳出されてより相次で訳出を見たが、併し浄土教の擡頭は殆んど史上に見られず、僅に助念の方法として用いられた程度である。更に五十年を経過した東晋時代、廬山慧遠（三三四—四一六）が同志百二十三人と共に般若台の阿弥陀仏の前に西方願生を期したのが史上特筆されている。即ち念仏三

昧詩序に諸衆三昧と念仏三昧を明白に區別し、一代仏教を批判して念仏三昧を選択して念仏為先、切高進易と念仏の勝易二徳を開顯したが、しかも所謂禪淨未分の念仏である。慧遠の西方願生は純然たる他力念仏でないことは明かで、これは更に百年後の鸞師を俟たねばならなかつた。慧遠歿後七年元嘉元年(西紀四二四)西域僧曇良耶舍によつて觀經が伝訳されたことが、如何にシテ淨土教の展開の上に影響したかは想像以上のものがあり注目に価する、松本文三郎氏が隋唐に於ける淨土教が廓然として闡明された理由は觀經の伝訳に関連して見なければならぬと指摘されたのは注意すべきものと思う。觀經の伝訳が人と時を得たか、北魏の曇鸞法師(西紀四七六—五四二)に至つて淨土教は初めて独立の位置をとるに至つた。鸞師は四論の研究者であつたが、菩提流支より觀經を得て淨土門に帰向され、天親の往生論を註釈して自己の思想信仰を告白している。即ち論註巻頭に難易二行を批判し、五独の世無仏の時阿毘跋致(不退)を求むるを難行とし、その理由として五難をあげているが、その第五に「唯是れ自力にして他力の持なし」と言

い、易行道に關しては「但だ信仏の因縁を以て淨土に生ぜん」と願すれば仏の願力に乗じて便ち彼の清淨の土に往生することを得、仏力任持して即ち大乘正定聚に入らしむ」と説いている。これ鸞師教学の根本的態度である。龍樹の二道判が行体に約しているのに対し行縁に重きを置いている。即ち教法の価値はその法の眞実性とその教法を修道する人の上の機の現實性の調和によつて左右されると強調している。これは長く一貫する淨土教の特質でこれによつても淨土宗の始祖たる地位は動かない。元來往生論が本來聖者の性格をもつて五念門を説くが、鸞師は往生論の「普共諸衆生往生安樂國」の衆生を会釈するに八番の問答を設け、十八願成就の文を引いて「一切外凡人」と言い、又觀經下二品を注意して下品の凡夫としている。論に比して機の凡夫的自覚が著しく相違することは驚異的な展開である。當時の教界に於ける動向よりして鸞師の出現は正に奇蹟と称せられたのは故なしとしない。故に僧肇^④の論法を用いて法身の名稱にて報身を顯はし、報土を指方立相的に西方に見られている。凡夫の報土に往生することは一見矛盾であ

るが、この矛盾を超越するものは本願力なりとは鸞師の体験である。故に論の五念門を修して何故に自利他し速に菩提を成就し得るかと言う理由として「阿弥陀如来を増上縁と為す」として第十八、第十一、第二十二の三願を的証として論断されている。論註下巻に生即無生を示して「氷上に

火を燃けば火猛なれば則ち氷解け、氷解けば則ち火滅するが如し、彼の下品の人、法性無生を知らずと雖も、但だ仏名を称する力を以て往生の意をなし、彼土に生ぜんと願すれば彼土は是れ無生界なれば見生の火自然に滅するなり」として下凡のために本願称名の發揮につとめているのは浄土

教史の大功績であるが、特に鸞師自身の修道の問題としてある点に注意を要する。即ち論註の最後に「愚かなるかな、

後の学者、他力の乗すべきを聞いて当に信心を生ずべし、自ら局限すること勿れ」と結んでゐる一句は論註の他力説が全く自己の体験を通して出でたことを雄弁に物語つてゐる。故に論註下巻に「此の無上菩提心は即ち是れ願作仏心なり、願作仏心は即ち是れ度衆生心なり。度衆生心は即ち衆生を攝取して有仏の国土に生ぜしむる心なり」と言い、

又「彼の安樂浄土に願生せんとする者は要す無上菩提心を發すべし」と道破して聖道と融和されているが、浄土教が大乗仏教の菩提心即ち浄土国土成就衆生を期待しなくてはならない点を強調されたのは、よく浄土教の真義を開願したものと云へるであらう。

道綽禪師(五六二—六四五)の教の基調は教が時と機に相応すべきとする所にあつた。四十八歳鸞師の旧蹟たる石壁玄中寺にあつた碑文を見て浄土門に転向されているからその感化のほども首肯される。鸞師が五浊の世無仏の時と言はれたのを承け、更に末法々滅を痛感して鸞師より一層痛烈に主張されている。鸞師は機が世と時に制せられるとして人間性に徹したが、綽師は特に時を重視して之に制せられる機に相応する教を説いてゐる。その著安樂集は「依觀經及び余諸部」といひ、又觀經を特に「此經」など呼び、且つ觀經を講ずること二百遍とあるからその講録であるから、觀經の基調になりしことは注目される。觀經によつて機の凡夫的自覚より往生浄土の高揚が見られる。即ち第一大門に教興の所由を明し、約時被機を論じて「若し^⑩

教時機に赴けば修し易く、若し機と教と時と乖けば修し難く入り難し」と述べ、大集月藏經の五箇の五百年を引証されている。即ち今時は仏世を去つて後第四の五百年に相当するを以て修福懺悔し、仏道修行者の最後の時なることに悲痛な自覚をされている。是れ衆生聖を去ること遙遠に機解浮浅にして暗鈍なり、機が時に制約されるから必然的に相応する宗教的自覚より往生浄土が求められなくてはならない。ここに聖浄二門の教判を以て浄土門別立の意図を示されている。「去大聖「遙遠」「理深解微」の二理と「我末法時中、億々の衆生、行を起し道を修するに未だ一人の得る者あるなし、当今は末法現に是れ五濁惡世なり、唯浄土の一門のみあつて通入すべきの途なり」との経証を出して時機に相応した浄土門こそ現実に五乘齊入の路なる所由を判決している。かつ綽師の思想的立場が涅槃經にあり、伝に大涅槃經を講ずること二十四遍とある。本經は仏性常住を説くと共に王舎の悲劇を叙して末法教會の墮落を詳細に叙述し安樂集に十五度引用しているから、この影響もあつて時機と調和する凡夫觀を愈々確信するに至つたのである

う。更にかの北周武帝の破仏が綽師の少年時代に行はれ、その慘状を目撃せられるに及んでは愈々末法觀の深刻なる内觀を要請されるに至つたことは当然のことである。ここに人の上の機の思想補充せられ、遂に第十八願を觀經の經意で解釈され「若し衆生あつて縱令い一生惡を造るも、命終の時に臨んで十念相統し我が名字を称して、若し生ぜずんば正覚を取らじ」と率直な願意開顯は特筆に価し、所謂淨仏国土なるものは唱導されないが、涅槃仏性常住の大乗に基調しつつ機の自覚に立つて宗教的な浄土を念願されている。

- ① 望月信亨氏「支那浄土教理史」境野黄洋氏「支那仏教史の研究」
- ② 松本文三郎氏「仏教史の研究」
- ③ 統高僧伝第六、浄土論下巻、仏祖統記第二十七卷。往生浄土瑞応刪伝等
- ④ 統高僧伝には觀經とあるが、大經(日溪法霖)小經(雲棲株宏)往生論(三論系譜)等の異説がある。
- ⑤ 浄全第一卷二一九頁
- ⑥ 林彦明氏「専修字報第十三号」
- ⑦ 浄全第一卷二四六頁

- ⑧ 淨全第一卷二五六頁
 ⑨ 淨全第一卷二五四頁
 ⑩ 統高僧伝第二十卷、淨土論下卷、仏祖統記第二十七卷
 ⑪ 淨全第一卷六七三頁
 ⑫ 淨全第一卷六九三頁
 ⑬ 同 右

三

善導大師の伝記を録するものは統高僧伝第二十七卷以下三十四部に及んでゐる。併し信すべき資料としては統高僧伝と百年後に成る往生西方淨土刪伝及び懷懺の碑銘等僅少と言はれてゐる。偏依善導と帰敬されし法然上人の類聚淨土五祖伝も統高僧伝、瑞応伝、新修往生伝等の六伝を抄録されてゐて詳細でない。正史の上に生歿の年時すら所載されず、信憑すべき統高等より推して敬虔な念仏者であり、厭欣の情切なる願生者であつた。同時代の道宣が「近ごろ山僧善導なる者あり」と記録してゐるが果して如何なる程度まで認識してゐたか考えさせられる。新修往生伝によると三論の明勝に就て出家したと言ふ伝説より良忠上人の教判論より推定して三論の系統とされてゐるが、当時盛んであつ

た天台、三論、地論、撰論等に通曉されてゐたことはその著書より推して十分肯される。瑞応伝には道英法師を大喝し、念仏鏡には金剛法師と対論して之を論破されたところから、仏教学に造詣深かつたやうである。新修往生伝によると身を持つること極めて嚴肅、平生乞食し三十余年一定の寝所なく、暫も睡眠せず、洗浴以外は三衣を脱せず、戒法を護持して穢毫も犯さず、目を挙げて女人を見ずと言ふ持戒堅固なる性格の念仏者であつた。同時に弥陀經を書写すること十萬卷、淨土變相を書くこと三百鋪、塔廟の破損せるもの尽く修覆したと伝へられる。且つ導師は自戒自行に精進される一方、終南山を本拠として光明寺、實際寺、大慈恩寺等に於て民衆の教化に努力せられ教化の実績は並々ならぬものがあつたやうである。その結縁の爲めであらうか、先年大谷光瑞氏の燉煌出土品中には弥陀經の断片があり唐代の書体になる願往生比丘善導願写弥陀の識語がある。淨土變相を画くこと三百鋪とあるが、我が当麻曼荼羅の原本もその創案になるものとは早く西山証空の指摘される所で、人をして淨土の信念を發起せしめんが爲であり、その

感化は注目されてよい。又懷感の帰依者高宗の發願になる龍門の盧舎那大仏の造龕記によつて唐代芸術の粹なる造像の檢校であつたなど、幾多の事蹟は唯單なる念仏信仰の報恩行の發露とのみ見るべきでなく、淨土信仰の現証に基調する止むに止まれぬ淨仏国土の行願と見るべきでなからうか。單なる厭欣の念仏者ではなかつたのである。淨仏国土成就衆生を眼目とする菩薩行は時代の民衆の隠れたる念願を現行せられている。淨仏国土が衆生を成就するにありとすれば、衆生を成就するとは一切衆生の要求を満足せしめる外にはない。導師の教化は真に當時の民衆教化によつて満足せられたと言はねばならない。此の観点より導師の伝歴を通して淨仏国土の聖業が淨土信仰に基て成就されたと言へる。故に導師は確に當時の社会の一面に於て大きな存在であつたと言ふべきである。されば瑞応伝に時人の言として「仏法東行已來未だ禪師の如き偉徳を見ず」と稱讚されしもの当然のことである。

- ① 統高僧伝第二十卷、迦才淨土論下卷、仏祖統記第二十七卷、淨土瑞応伝、以下善導伝資料の研究録は多い。

- ② 統淨第十六卷九二頁
③ 東宗要第一卷（淨全第十一卷四）
④ 統淨第十六卷九一頁
⑤ 望月信亨氏「淨土教の研究」
⑥ 金石華編第七十三の七
⑦ 統淨第十六卷六頁

四

導師の著作と伝うるもので諸録に載すもの十四部あり、現存八部中、真撰として觀經疏四卷が注目されることは言うまでもない。鸞綽二師の影響はあるが、特に導師が法を主体とし、機の一点に集注して自己の機を反省内觀することを根本要件として一貫している。これは觀經の味説身証より導かれたものである。導師に大經に關する弥陀義なる積義があつたとは言へ、伝説に依れば曇鸞法師が菩提流支より觀經を授けられ、又鸞師の精神的嗣法者道綽禪師が鸞師の遺蹟に於て二百余回觀經の講説をされ、且つ導師もこの講席に列せられている。先には導師が經藏に於て有縁の經として得られ、祖師相伝の經であり、三昧發得の經であるなど諸有因縁も關連したであらうが、觀經に直參して

經の根本精神は往生淨土を明すにありて着眼身証されている。而も導師は導師自身の立場に於てなされている特色をもっている。

導師自身の立場として先づ注目されるのは仏說經典を了教、根本經として絶対依憑し、先徳論師の論釈を不了教、枝末教として依用されない。此の点は鸞綽兩師が或は大論往生論等を有力なる義釈とされしに關らず、殆んど顧みられなかつた。即ち玄義分に「未審す今時一切の行者、知らず何の意ぞ、凡小の論には乃ち信受を加へ、諸仏の誠言をば返つて妄語とするや。苦しきかな、なんぞ劇しき。能く此くの如き不忍の言を出すや、然りと雖も、仰ぎ願くば一切の往生を欲う知識等、善く自ら思量せられよ。寧ろ今世を傷んや。錯て仏語を信ずとも、菩薩の論を執して以て指南と為すべからず。若し此の執に依らば、即ち是れ自ら失し他を誤らん」と語調鋭く反駁されている。この經典絶対依憑は導師の確信に基づくとは言へ、直接の動機は当時隆盛なる撰論、唯識の別時意説に對する反駁である。真諦により訳出された無著の撰大乘論三卷、世親釈論十五卷は次第

に流行しその論理的推理性に学徒の共鳴を呼び、撰論学徒は下二品の十声称名を以て即往生の微因となるに過ぎないと主張する。撰論の唯願無行説に對して、所謂名号釈を試み願行具足なることを高調されている。先に道綽禪師は安樂集に涅槃經を引用して過去の宿善により即生するとの弁明を試みられているが、これに刺戟されて導師は玄義分の始終を通して猛然として反駁し仏願力の独用を以て会釈されている。即ち如来の本願力に誓約された十念の称仏が必ず順彼仏願故の行たることを懇切に指示され、且つ論師の説を取り上げるに及ばないと口吻が見られ人間の機に對する自覚が閃めいている。菩提心は仏を信ずる心である。飽くまで隨順仏教隨順仏意の態度である。故に玄義分には「今此觀經の中の十声の称仏には即ち十願十行ありて具足す。我が名字を称して下十声に至り我が願力に乗じて若し生ぜずば正覚を取らじ」と又往生禮讚には「上一形を尽し下十声一声等に至るまで仏の願力を以て往生を得易し」と、又散善義には「一心に専ら弥陀の名号を念じ(乃至)是を正定業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」。又「上来定

散兩門の益を説くと雖も、仏の本願の意に望むれば衆生をして一向に専ら弥陀の仏名を称せしむるに在り」と。唯願無行のものに非ずして仏の本願に順ずる限り真実の行業たる所由を高調されている。

導師は大經によつて弥陀の本願の教法を深められたことは弥陀義の著作のあつたことで推知されるが、愚凡の救済を自己に即して味得体験されたのは觀經によつてなされ、十方諸仏の証あるによつて愈々確信を得られたのは小經による。三仏三經によつて凡愚の往生淨土を確信されたが故に諸余の論に身を籍されず専心本願念仏を信行されたものと言へる。玄義分に「一切善惡の凡夫の生ずることを得るは皆阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁とならずと云うことなし。又仏の密意弘深なり、教門曉らめ難し、三賢十聖も測つて闕ふ所にあらず。況んや我が信外の輕毛なる敢て旨趣を知らんや」とあるから、導師の信仰は飽くまで觀經に根拠を置いていることが分る。更に散善義深心釈に機法二種の信を挙げ「決定して深く彼の阿弥陀仏の四十八願をもつて衆生を摂受したまへば、疑なく慮なく彼の願力

に乗じて定んで往生を得と信ず。又決定して深く釈迦仏にこの觀經の三福九品定散二善を説き、彼の仏の依正二報を証證し人をして欣慕せしめたまふことを信ず。又決定して深く弥陀經の中に十方恒沙の諸仏一切の凡夫決定して生ずることを得ると証勸したまうを信ず。又深信というは仰ぎ願くは一切の行者等一心に唯仏語を信じて身命を顧みず、決定して依行せよ、仏の捨てしめたまうをば即ち捨て、仏の行ぜしめたまうをば即ち行じ、仏の去らしめたまう処を即ち去る。これを仏教に随順し仏意に随順すと名づけこれを仏願に随順すると名け眞の仏弟子と名づく。」とあつて三仏三經の大悲のある所に深い信念の躍動を見ることが出来る。菩提は法を信ずるところにあることを明にしている。かく導師は機法の關係に就て法の上より機を参照されたが、又同時に直接自己に即して深刻な反省内觀をされた、人間惡の罪惡觀であり、業報に基く出離の縁なき懺悔である。玄義分に「決定して深く信ず、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫曠劫より己來常に没し常に流転して出離の縁あることなし」と言う自己の機に対する人間惡の念が、自ら絶對

善仏願の大慈悲心を信ぜしめる。機の反省は自と法の深信と相関し不可分のものであること勿論である。

この体験あつてこそ凡夫の為めの浄土教が真実に生きるものである。この反省内観は観經の味読に基く、観經に基て人間觀を規定するに悪の人間性を肯定されたところに観經解釈に劇然と方向転換を与へている。即ち観經に「汝はこれ凡夫にして心想羸劣なり」、「未來世の一切衆生の為に煩惱賊の爲めに害せらるる者の爲めに清淨の業を説かん」。

「汝等憶持して広く大衆の爲に分別解説せよ」。「無量壽仏、身量无边、是れ凡夫の心力の及ぶ所に非ず」と極言し、散善の下三品の行人の救はるる經説に異常の感銘を受られ、且つ自己に即して観經の再吟味をされた故に定善及び三輩の經文より仏滅後の五独の凡夫である九品の階位を吟味されている。即ち導師以前の諸師^②が高く評価しているに對し導師は九品の差あるも縁によつて異なる凡夫に過ぎないと断言して玄義分^③に四条、即ち第一に淨影の説を挙げ、第二に道理を以て破斥し、第三に九品の文を挙げて重破し、

第四に文証を示して九品皆な凡夫なる旨を論明し、上品三

人遇大、中品三人遇小、下品三人遇惡の凡夫なりと規定し、特に下品三人の救済に異常なる感銘を示され、自己に即して本願の救済が実地に動く様態を顕現したものとされていゝる。これ人間性を肯定する古今楷定の妙釈として光輝を放つ所由である。観經が自己に即して凡夫の爲めに説かれたと規定されたのは当時他に見られない画期的見解にして導師にして初めて為されたことは注意すべく、導師の生涯を支配したのはこの凡入報土の教説である。此の觀点より所謂指方立相の浄土を規定し、定善義には「今此觀門等は唯方を指し相を立て、心を住して境を取しむ、総じて無相離念を明さざるなり」、としその理由として「如来懸に未代罪浊の凡夫を知らしめし、相を立て心を住することすら尙ほ得ること能はず、何に況んや相を離れて事を求むるをや、術通なきの人、空に居して舍を立つる如きなり」と論断されている。この指方立相の浄土を願生する信機と信法のそのままが念仏のうちに統攝されつつ展開する浄仏国土が具現する所由は導師の伝歴の上と併せて明瞭に肯定されると言ふべきである。

①望月信亨氏「浄土教の研究」等の善導伝研究論著に詳述されて

いる。

② 伝通記採鈔第三十八卷（浄全第三卷八三〇）

③ 浄全第二卷一〇頁、

④ 同右

⑤ 浄全第一卷六八五頁、

⑥ 浄全第二卷一〇頁、

⑦ 浄全第四卷三五六頁、

⑧ 浄全第二卷五八頁、七一頁、

⑨ 浄全第二卷二頁、

⑩ 浄全第二卷五六頁、

⑪ 同右

⑫ 浄影の觀經疏（浄全第五卷一九〇）、天台の觀經疏（浄全第五

卷二一五）

⑬ 浄全第二卷五頁、

⑭ 浄全第二卷四七頁、

五

導師の機の宗教的自覚より、仏は彼岸の浄土に在して念
仏の衆生を撰取されるとはその信念として動かないとこ
ろである。故に玄義分には「釈迦は此の方にして發遣し、
弥陀は即ち彼国より來迎したまう。彼に喚び此に遣る、豈
に去らざるべけんや。唯だ勸心に法を奉けて畢命を期とな

すべし。此の穢身を捨てて即ち彼の法性の常樂を証すべ
し」とあり、散善義にも「仰いで釈迦の發遣して西方に
指し向えたまうことを蒙り、又弥陀の悲心をもつて招喚し
たまうに藉り、今二尊の意に信順して水火の二河を顧み
て、念々に遣ることなければ、彼の願力の道に乗じて命を
捨て己つて、彼の国に生まるるを得、仏に相見えて慶喜す
ること何ぞ極らん」。とあるに由つて指方立相の深き信
に往せられたことは自ら明なり。この往生浄土の信行に如
実相應するところ、仏は未來を待たず罪独に苦惱する衆生
即ち自己に現に救済の慈悲を垂れされつつあるその現証の
体験を表白されているのである。信行如実なる者の心理態
に見らるるものである。石井教道氏も指摘されているが、
鸞綽兩祖には明確に現実救済の実が見られず、導師に於て
觀經の味読より浄土の信証を此土に歛喜実感されている。
即ち觀經第七觀に韋提希の爲めに、無量寿仏は空中に住立
し觀世音大勢至の二菩薩は念仏者の左右に侍立されてある
との經文を自己に即して明了に感受されているし、更に
第九卷の釈には三縁を明して「何を以てか仏光普く照すに

唯念仏の者のみを撰す、何の意があるや。答て曰く、此に三義あり、一には親縁を明す、衆生行を起して口常に仏を称すれば仏即ち之を聞き玉う。身常に仏を礼敬すれば仏即ち之を見玉う。心常に仏を念すれば仏即ち之を知り玉う。衆生仏を憶念すれば仏亦衆生を憶念し玉う。彼此の三業相捨離せず。故に親縁と名づく。二には近縁を明かす、衆生仏を見んと願すれば、仏即ち念に應じて現に目前に在ます。故に近縁と名づく。三には増上縁を明す。衆生称念すれば、即ち多劫の罪を除く、命終らんと欲する時、仏聖聚と与に自ら来て迎接し玉う。諸の邪業繫能く碍る者のなし、故に増上縁に名づく。とある如く、本願念仏を如実に信行する所、命終に仏の迎接を蒙ると共に、念仏者の身辺に現に光明を以て護念撰取されつつある弥陀の積極的救済が説かれている。切実に歓喜される心理態である。故に真実なる念仏の信行あるところ、苦惱の人生現実ながら浄土の模写であり、同時に浄仏国土顯現の菩薩道でなければならぬ。導師は増上縁にも^⑥観念法門に大観小三經、般舟經、十往生經、淨度三昧經を引用して五種を挙げ、一に滅罪増上縁、

二に護念増上縁、三に見仏増上縁、四に撰生増上縁、五に証生増上縁を詳述して念仏護念の現実撰取相を示されているが、仏と共にある法悦こそ浄仏国土の如実なる行願に相応するものと云わねばならぬ。浄仏国土の念願、即ち菩提心に就て鸞師は必須条件として強調されているに對し導師は三心具足の要を説いて菩提心のことは余り述べられていない。即ち往還二回向を以て三心中の回向心の義となし、^⑦玄義分には「道俗の時衆等各無上心を發すべし」。と言い、又「願はくば此の功德を以て平等に一切に施し同じく菩提心を發して安樂國に往生せん」、と言はれているから回向心を菩提心と同統されたことと推知される。若しそうだとすると三心は闕くことを得ないのであるから菩提心正因を強調されたものと言える。この菩提心は仏意に隨順するものと会釈される。又導師は五念門をも特に重要視され、往生礼讚に讚歎為正（称名為正）の内意ありとは言え、廻向門を立てて集むる所の一切の善根功德を以て自身住持の業を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲し、一切の衆生を撰取して共に安樂國に生ぜんと作願すべしとあるのは、

菩薩の利地大悲を以つて往生の一行としたのであつて、大乘仏教の根本精神を体すべきことを明にされたと言うべきである。されば導師の伝歴の上に教化の上に見らるるものは報恩の聖業であると共に浄仏国土の菩薩の行願を現行されるものであると言わねばならぬ。

① 浄全第二卷二頁、

② 浄全第二卷六頁、

③ 石井教道氏「大正大学々報矢吹博士記念号」

④ 浄全第一卷四二頁、

⑤ 浄全第二卷四九頁、

⑥ 浄全第二卷二二七頁、

⑦ 浄全第二卷一頁、

⑧ 浄全第十七卷二頁、